

編 集 後 記

本号では2つの原著、16の症例報告、そして1つの提言が掲載されています。症例報告の占める割合が高いのですが、優れた原著論文も投稿されるようになってきています。本号では、直腸癌の肛門側への癌進展の全割標本による検討と術中止血困難な急速大量出血例に対するガーゼ圧迫止血における感染の立場からの抜去時期の検討に関する原著論文が掲載されています。2つの論文ともに、臨床上、重要な問題が取り上げられていると思います。症例報告は各臓器の貴重な症例が掲載されていますが、内容は非常に変化に富んでいます。臨床医学が症例の積み重ねによるものであることから、症例報告は大切であるが、一方で、若い外科医の方々が初めて医学論文の執筆となることも少なくありません。非常にまれな症例の報告の場合もありますが、過去にいくつかの報告が行われていることもあります。症例報告では、これまでに同様な報告がどの程度あったのか明らかにすることが大切ですが、過去の報告が多い場合、どうしても新奇性に乏しくなってしまいます。これまでの症例報告に比べ、今回の症例報告にどのような特徴があるのか、どこに希少性があるのかを明確にした症例報告としてまとめていただきたいと思います。本誌に掲載されている症例報告は、そのような観点からも査読されており、報告の仕方自体も重要となります。本号では、最後に提言が掲載されていますが、今日における外科医の教育を考えるうえで重要な内容を含んでいます。今日の各術式は高度化してきていますが、臍頭十二指腸切除術のような高難度手術でも指導体制により良好な成績を得ることが可能であることが示されており、術式の標準化とともに指導体制の充実、今後の外科医育成の重要な課題といえます。

今回の編集後記は北京にて執筆しております。中国における医師の地位は日本に比べ低いのですが、リスクの高い外科医の待遇は良く、外科の人気は高いようです。地域の医療格差は日本以上で、やはり北京などの大都市に医師の集中が見られ、一方で、大都市では医師の就職難も生じています。また、日本と同様に医療訴訟が多いことには驚きました。

最後に、本誌はオンライン投稿に向けて準備を進めており、投稿や査読がよりスムーズに行われるようになります。会員諸兄の投稿を期待しております。

(柏木秀幸)